



ローレンス・ターナー《アンティープ、夕暮》1814年

STRASBOURG

ストラスブール美術館展

モダンアートへの招待

2012.10.27 SAT — 12.16 SUN

シニャック / ロートレック / コンディンスキー / ビカソ / ローランサン

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：小川・山本 広報担当：鈴木・大庭

静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F info@shizubi.jp
Aoi Tower 3F, 17-1, Koyamachi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN
tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

フランス北東部アルザス地方の中心都市ストラスブールは、ドイツとフランスの影響を受け、独自の文化を育んできました。

本展覧会では、ストラスブール美術館のコレクションを中心とした約60作家80点の作品により、19世紀から現代に至るモダンアートの流れをアルザスの近現代美術とともにたどります。

ロセッティ、シスレー、ゴッガン、シニャック、ドニ、ヴラマンク、アルプ、マグリット、エルンスト、レジェ、ピカソ、ピカビア、マッタ等、時代を代表するモダンアートの巨匠たちの交響を是非お楽しみください。

■ 開催概要 ■

■会期 平成24年 10月27日(土) - 12月16日(日)
休館日/毎週月曜日

■会場 静岡市美術館
(静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3階)

■開館時間 10:00 - 19:00 (入場は閉館30分前まで)

■観覧料 一般 1,000円(800円)
大高生・70歳以上 700円(500円) *中学生以下無料

※()内は前売および20名以上の団体料金

※障害者手帳等をご持参の方および介助に必要な方は無料

※前売券:8月11日(土) ~ 10月26日(金)

前売券発売場所:

静岡市美術館

チケットぴあ(Pコード765-286)、ローソンチケット(Lコード40774)

谷島屋呉服町本店、戸田書店静岡本店、戸田書店城北店、江崎書店バルシェ店、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店

■主催 静岡市美術館 指定管理者 (公財)静岡市文化振興財団、テレビ静岡

■後援 静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、フランス大使館、静岡日仏協会、
中日新聞東海本社、静岡リビング新聞社、K-MIX

■協賛 損保ジャパン

■協力 エールフランス航空

■企画協力 ホワイトインターナショナル

◆巡回スケジュール

福井県立美術館

横須賀美術館

静岡市美術館

(4月20日 - 5月20日) 茨城県近代美術館 (5月26日 - 7月16日)

(7月21日 - 9月2日) 愛媛県美術館 (9月9日 - 10月21日)

(10月27日 - 12月16日) <国内最終会場です>

I. 象徴主義 Le symbolisme

19世紀後半の文学や美術では、自然主義や歴史画などを重んじるアカデミーに反発し、対象を忠実に描くのではなく、人間の内面など言葉で言い表せないものを描こうとした象徴主義が起こります。この動きはヨーロッパ全体に広がり、様々な表現を生み出しました。イギリスで起こったロセッティ等のラファエル前派はその先駆けとして知られています。

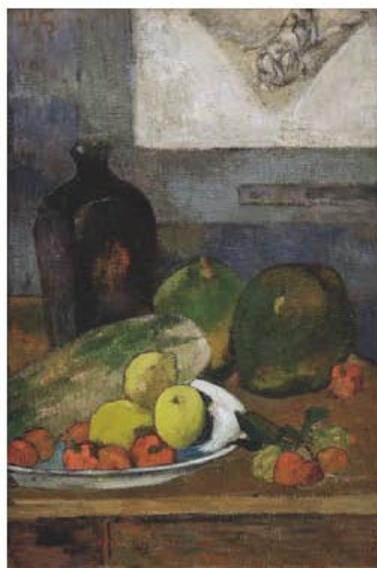
フランスでは、ゴーギャンや、ナビ派の画家たち（ドニなど）、また本展には出品されていませんが、モローやルドンなどが象徴主義を代表する作家です。

本章の見どころ



◀ ダンテ・ガブリエル・ロセッティ
《解放の剣にキスをするジャンヌ・ダルク》
1863年 油彩・カンヴァス
61.2×53.2cm

百年戦争でのフランスの勝利や勇気を象徴した「ジャンヌ・ダルク」シリーズの中の一つ。



▲ ポール・ゴーギャン
《ドラクロワのエスキースのある静物》
1887年頃 油彩・カンヴァス
40×30cm

アダムとイブの楽園追放と、ゴーギャンにとっての「楽園」であった南国の果物が対照的に描かれています。



▲ モーリス・ドニ
《室内の光》
1914年頃 油彩・カンヴァス
98×125cm

幸せな家庭生活の一コマを、大地の豊穡、信仰の表明、愛の象徴として描いた作品。

II. 印象主義からフォーヴィスムへ De l'impressionnisme au fauvisme

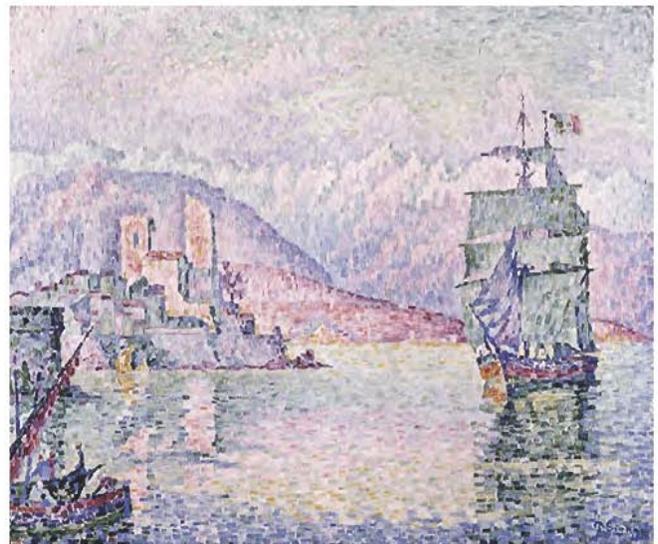
1874年に開かれた無審査の展覧会に参加したモネ、シスレー、ピサロ、ルノワール等、後に「印象派」と呼ばれる画家たちは、単に対象を写すのではなく、目の前にある物の移ろいゆく様を表現しようとしていました。彼らは、当時の光学研究に基づいて、輪郭を弱め混色を避けたやさしい色調を用いました。その後、この印象派の革新はさらにもう一步推し進められ、まずスーラ、シニャックらによって点描による筆触分割技法が生み出されます。また、ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌや、さらに彼らから影響を受けた、奔放な色彩による表現で「フォービスム（野獣派）」と呼ばれた画家たちは、より自由な画面構成と色彩を用い、20世紀の抽象表現に道筋をつけました。

本章の見どころ



▲アルフレッド・シスレー
《家のある風景》
1873年 油彩・カンヴァス
45.7×61.2cm

ここでは印象派の特徴はまだはっきりとは現れていませんが、一瞬の風景への感動を軽やかなタッチと色彩で描いています。



▲ポール・シニャック
《アンティープ、夕暮れ》
1914年 油彩・カンヴァス
73×92cm

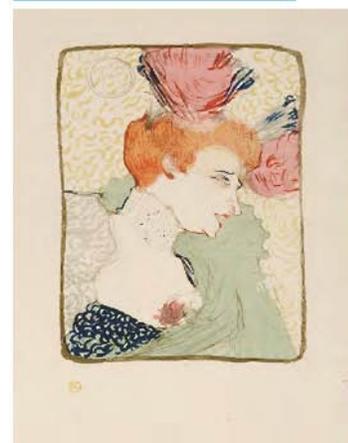
南仏の美しい夕暮れの光景をモザイクのような細かい色面で描く分割技法で表しています。

愛媛・静岡会場のみ出品



▲ピエール・ボナール
《テーブル上の果物鉢》
1934年頃 油彩・カンヴァス
41×65.5cm

伝統的な遠近法ではなく、色彩のコントラストで奥行を出そうとしています。ボナールは、裝飾的な色彩技法が特徴の「ナビ派」の画家の一人でした。



▲アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
《マルセル・ランデル嬢の胸像》
1895年 8色リトグラフ・紙
58.5×42cm

マルセル・ランデルは当時パリで人気の女優。ロートレックは彼女を見に20回以上劇場に通ったといわれています。

アルザスゆかりの作家 1

ロタール・フォン・ゼーバッハ (1853-1930)



《リラの花束》▶
1894年 油彩・カンヴァス
136.5×107cm

ドイツ・バーデン地方の貴族の家に生まれ、1875年にドイツ帝国に併合後のストラスブールに移住しました。1909年、彼はストラスブールの高等装飾美術学校の教授に任命され、アルザス美術界の中心的存在となります。1918年11月にアルザスがフランスに帰属すると、フランス国籍を申請します。静物や花を主題とする作品を得意としましたが、1882年にパリで第7回印象派展を見てからは風景画に専心し、「アルザスの印象派」とも呼ばれました。肖像画も多く描いており、ストラスブール美術館には、ゼーバッハの重要な作品が多く所蔵されています。

Ⅲ. キュビズムとエコール・ド・パリ Autour du cubisme et l'école de Paris

1907年、セザンヌの影響を受けて、ピカソとブラックは対象を一度解体し、様々な視点から再構成するキュビズムを始めました。画面からは遠近感や質感がなくなり、記号化されたように見えますが、1912年頃からピカソやグリズ等により、様々なオブジェを寄せ集めて作るアサンブラージュや新聞などの異質なものを張り付けるコラージュの技法を用いて、現実の物のリアルな質感が絵画空間の中に持ち込まれました。また、この当時のパリには世界各地から多くの芸術家が集っていました。特にモンマルトルやモンパルナスに住み、キュビズムやフォービズム等の特定の運動に参加せずに活動した画家たちのことを「エコール・ド・パリ (パリ派)」と呼び、シャガール、ローランサンなどが代表的な画家です。

本章の見どころ



愛媛・静岡会場のみ出品

◀フアン・グリズ

《静物》

1922年 グワッシュ・ステンシル・紙
25×32.8cm

幾何学的な抑制された色調の平面の中に、ギターやワインボトルなどのモチーフを輪郭線で描き、対象を浮かびあがらせています。

その他の注目作品…

パブロ・ピカソ《座る女性の胸像》1960年 油彩・カンヴァス 97.8×79.8cm ウンターリンデン美術館

フェルナン・レジェ《青と赤の静物》1938年 油彩・カンヴァス 73×92cm ウンターリンデン美術館

マリー・ローランサン《マリー・ドルモワの肖像》1949年 油彩・カンヴァス 35×26.8cm

ジョルジュ・ブラック《静物》1911年 油彩・カンヴァス 33×41cm

マルク・シャガール《おんどり》1950年頃 グワッシュ・紙 48.2×38cm

(*以上の作品は著作権の都合上、本プレスリリースに画像を掲載することができません)

IV. 両大戦間期の写実主義 Réalistes de l'entre-deux-guerres

第一次大戦後、フランスでは以前のようなアヴァンギャルドな動きは影をひそめ、古典回帰の風潮が見られるようになり、あのピカソやレジェでさえも具象の作品を描くようになります。ドイツでは、敗戦への絶望感と、ヒューマニズムを抑圧した国家主義への批判から表現主義が展開され、その後より社会批判的な性格を強めた新即物主義が生まれました。

本章の見どころ



▲ ギュスターヴ・ストスコフ
《オーベルゼーバッハの衣装を着た
マルタン・ズイリオックス》
1943年 油彩・板
80×59cm

アルザスの伝統的な衣装を着た人物を、当時のドイツで流行していた新即物主義の手法を用いて表しています。



▲ リザ・クリューゲル
《サボテンのある静物》
1927年 油彩・カンヴァス
65×54cm

フランス回帰を目指した「グループ・ド・メ」のメンバーの一人。彼らが敬愛していたセザンヌ風の静物画ではありますが対象を見つめる眼差しは、静謐な空間を作り出した「新即物主義」の影響もうかがえます。



◀ フェリックス・ヴァロトン
《水辺で眠る裸婦》
1921年 油彩・カンヴァス
122.5×192.5cm

古典主義の画家アングルを見習っていたスイスの画家・ヴァロトン。ここでは、写実は理想的な美を描くためではなく、女性の謎めいた魅力を示すために用いられています。

アルザスゆかりの作家 2

アルザスの写実主義者たち

第一次大戦後にフランス領となったアルザスでは、フランスへの回帰が各所で見られるようになります。美術でも、写実主義へと向かう若い画家が多かったです。たとえば、1919年に結成された「グループ・ド・メ（五月会）」は、同時代的背景を受けて、アルザスの美術をフランス美術の系譜の中に取り込もうとしました。しかしメンバーの多くはドイツで教育を受けており、リザ・クリューゲルの作品からもわかるように、写実主義を指向しながらも、当時のドイツで流行していた新即物主義の影響もまたうかがえるのです。モチーフとしては、静物の他、工業など時代を表す図像や、アルザスの地域性への関心を示す作品も見受けられます。

V. 抽象からシュルレアリスムへ De l'art abstrait au surréalisme

印象派に始まった絵画の新しい流れは変化を続け、1910年代には形や色彩をさらに単純化した抽象絵画を生み出し、カンディンスキーは直線や平面を基本とした幾何学的な画面を描きました。また、第一次大戦後の虚無感を背景に、伝統的な価値観や秩序にとらわれない「ダダイスム」がジャン・アルプらにより開始され、ヨーロッパに広がっていきます。このダダイスムと、フロイトによって創始された精神分析学とをベースとして、人間の無意識の世界に挑戦したのが1924年に始まったシュルレアリスムでした。彼らは、現実を超えた世界を表すために、「オートマティスム（自動記述）」「フロッターージュ（こすり出し）」などの技法を用い、絵画表現の新しい可能性を切り開きました。

本章の見どころ



愛媛・静岡会場のみ出品

◀ ヴァシリー・カンディンスキー
《コンポジション》
1924年 グワッシュ・紙
22×18cm

幾何学的秩序が保たれている一方で、空間に漂うようなモチーフの配置が、この年に生まれたシュルレアリスムを思わせます。

その他の注目作品…

ジャン・アルプ《ダンサー》1926-1955年 油彩・カンヴァス 148×110cm

フランシス・ピカビア《女性の肖像》1938-1942年頃 油彩・板 65×54cm

マックス・エルンスト《二人の若い裸婦》1926年 油彩・カンヴァス 83.5×62.5cm

ルネ・マグリット《旅の思い出》1926年 油彩・カンヴァス 75×65cm

アンドレ・マッソン《魚に攻撃される馬》1932年 油彩・カンヴァス 81×116cm

ロベルト・マッタ《コンポジション》1970年頃 油彩・カンヴァス 135×135cm

(*以上の作品は著作権の都合上、本プレスリリースに画像を掲載することができません)

アルザスゆかりの作家 3 ジャン・アルプ (1886-1966)

ストラスブール出身の、そしてモダンアートの代表的な作家として最も有名なのは、**ジャン (ハンス)・アルプ**でしょう。ドイツ人の父とアルザス出身の母を持つ彼は、ドイツとフランスで美術を学び、また様々な芸術運動に参加し、芸術家たちと交流を持ちました。その後チューリヒに移り、のちに妻となったゾフィー・トイベルや、詩人のトリスタン・ツァラとともに1916年に「ダダイスム」の誕生にかかわります。さらに彼は3年後にドイツのケルンに移り、今度はマックス・エルンストとともに「ダダイスム」を推し進めます。この他にも、フランスで「シュルレアリスム」や「アブストラクシオン＝クリアシオン (抽象＝創造)」などの前衛グループに加わるなど、常に新しい芸術運動の中で活動を続けました。アルプの作品の特徴は、伝統的な手法にとらわれないことのない、コラージュや木片をカンヴァスに直接貼り付けるなどの幅広い表現方法を多用したこと、そして優雅さとユーモアを調和させたような動きのある有機的なフォルムにあります。ストラスブール美術館には、アルプの初期から晩年に至るまでの約50点の作品を収蔵しており、フランス国内でも代表的なアルプ・コレクションとなっています。ストラスブール市内にはこの他にも公共の場に彼の作品が残っています。

VI. 1960年代以降、コンテンポラリー・アート L'art après 1960

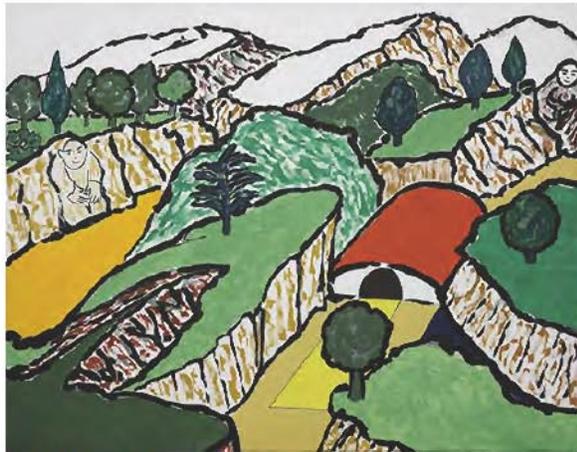
1960年以降の芸術は、写真、映像、空間全体を作品化するインスタレーション、身体を使ったパフォーマンスなど、その表現方法は多様化しています。一方で絵画に取り組む画家たちも、抽象・具象の枠にとらわれずに新しい表現を模索し、絵画の限界に挑戦し続けています。社会や芸術そのものへの問いかけが込められたこれら現代の作品からは表現の無限の可能性を読み取ることができるのではないのでしょうか。

本章の見どころ



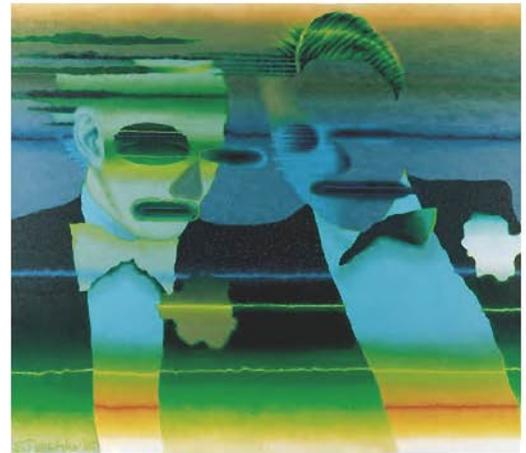
◀ジェラルール・ガジョロフスキー
《宿命或いは家族の絆、もうひとりのマルゴ》
1972年 アクリル・カンヴァス
80×80.5cm

イメージの再現に興味を持ち、写真をモノクロームで再現することで、人間の未知なる本質を描こうとしました。



▲ジャン＝ミシェル・サネジュアーン
《空間—絵画》
1978年 アクリル・ビニール・カンヴァス
80×115.7cm

1978年から展開された《空間—絵画》シリーズのうちの一つ。様々な色面を接合させて、風景を構成しています。



▲エド・バシュキ
《商業主義的》
1990年 油彩・カンヴァス
107×122.5cm

電子メディアに興味を持っていたバシュキは、テレビのような揺らぐ色彩や、走査線のような光線が走る作品が特徴。ここでは、メディアによって作られる人物イメージの虚構さを我々に投げかけています。

その他の注目作品…

A.R. ペンク 《システムビルド》1967年 油彩・カンヴァス 149×145cm
(*上記の作品は著作権の都合上、本プレスリリースに画像を掲載することができません)



ストラスブール近現代美術館 外観

ストラスブール美術館は、古典美術館、装飾美術館など10の美術館・博物館から構成される市立の組織です。今回の展覧会ではこのうち近現代美術館のコレクションが中心となっています。

近現代美術館は、1973年に創設された「近代美術館」が基礎となっており、1998年の秋にリニューアル・オープンしました。建物は、観光名所としても有名な「プチット・フランス」地区に程近い、イル川のほとりにあり、パリのラ・デファンス産業科学博物館を手がけたことでも有名な、建築家アドリアン・ファンシルベールによって設計されました。

収蔵品は約18000点にものぼり、印象派、象徴主義からダダ、シュルレアリスム、アルテ・ポーヴェラなどの現代まで、19世紀以降のヨーロッパ美術の全体像を見渡すことができます。このような網羅的なコレクションは、パリを除いた他のフランスの地方都市の美術館には見られず、ストラスブール美術館の大きな特色の一つとなっています。

特にストラスブールゆかりの作家であるギュスターブ・ドレやジャン（ハンス）・アルプのコレクションが有名で、またフランスの公的組織として始めてキュビズムの作品（本展にも出品されているジョルジュ・ブラック《静物》）を購入したことで知られています。

展覧会関連イベント

■ コンサート「美術と音楽の幸せな出会い」

ストラスブル近郊在住のバトリシア・パニーによるコンサート。本展代表作をスライドで投影しながら演奏します。近代を代表する巨匠たちのアンサンブルをお楽しみください。

出演：バトリシア・パニー（ピアニスト）

曲目：ベートーベン《ソナタ 作品109》、ブーランジェ《ピアノのための3つの作品》、ドビュッシー《前奏曲集》より「帆」「バックの踊り」「水の精」「花火」ヒナステラ《組曲 クレオール舞曲 作品15》

日時：11月18日（日）13:30 開場 14:00 開演 全席自由 **チケット制**

会場：当館 多目的室

料金：2000円 定員：100名

チケット発売：10月2日（火）発売開始

チケット発売場所：当館受付

協力：静岡日仏協会、●YAMAHA

バトリシア・パニー プロフィール

ヴェルディ音楽院（ミラノ）及びチューリッヒ音楽院を首席で卒業。1989年クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクールでファイナリスト、1990年アレクサンドロ・カサグランデ国際ピアノコンクール優勝。バロックから現代まで多彩なレパートリーを持ち、シカゴ交響楽団他、世界各地の有名オーケストラと共演。またスポレート、モントルー、ストラスブルなどの国際音楽祭にも数多く出演している。これまでに15枚のCDをリリース。現在はスイス国立ベルン芸術大学教授として後進の指導にもあたっている。



バトリシア・パニー

■ 講演会「モダンアートの魅力」

講師：立入正之 氏（静岡文化芸術大学 准教授）

日時：11月23日（金・祝）14:00-15:30（開場 13:30）

会場：当館 多目的室

定員：70名（応募多数抽選）参加無料

事前申込制 締切：11月9日（金）必着

申込方法：当館 HP 申込フォーム (www.shizubi.jp)、

または往復はがきにて。1件につき4名様まで。

※往復はがき記載事項 ①催事名、催事日 ②氏名（参加人数分） ③年齢 ④住所（郵便番号から） ⑤電話番号 返信面に宛先を記載の上、静岡市美術館まで。

■ ギャラリートーク

日時：11月3日（土・祝）、17日（土）

12月1日（土）、15日（土）

いずれも 14:00-

会場：展示室（要観覧券）

申込不要

当日インフォメーション前にお集まりください。

第9回



しずび子ピッコ プログラム



小さな子ども達のためのアート体験プログラム。お子様をお預かりする間、保護者の方は展覧会をご覧ください。

日時：11月10日（土）①10:30-12:00 ②14:00-15:30

会場：ワークショップ室

対象：2歳以上の未就学児 各回10名

参加費：子ども1人につき500円（※保護者は要観覧券）

事前申込制 締切：10月25日（木）必着

申込方法：当館 HP 申込フォーム (www.shizubi.jp) または
はがきにて

※ハガキでの申込は官製はがきに催事名、催事日、住所（郵便番号から）、保護者の氏名、子どもとの続柄、子どもの名前、人数、性別、年齢（月齢まで）、緊急連絡先、希望の時間帯を記載の上、静岡市美術館まで。



プレゼントワークショップ^o vol.8

クリスマスの準備をしよう

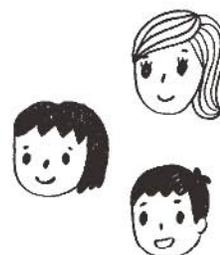
記念日に合わせて、家族や大切な人へのプレゼントをつくる「プレゼントワークショップ」シリーズ。ワークショップをとおして、プレゼントを「つくって、贈る」ことの大切さや、そこから生まれるコミュニケーションを見つめ直します。

日時：12月1日（土）13:00～16:30

会場：ワークショップ室（予定）

対象：小学生20名（予定）

参加料、申込締切日、詳しい内容等は、後日静岡市美術館HPにて発表いたします。



フランス映画特集

ストラスブールを舞台とした映画や、クリスマス为主题にした近年のフランス映画を上映します。

① 《シルビアのいる街で》 (2007年 スペイン・フランス 85分) ホセ・ルイス・ゲリン監督

日時：12月2日(日) 15:00～

中世の町並みの中を最先端のLRTが走り、独特な風情をかもし出す街ストラスブールでロケーションを敢行。6年前に愛し合った女性シルビアの面影を追い求めて、思い出の地をさまよう画家志望の青年の姿を、綿密に計算された音と映像で描く。公開当時、映画表現の新たな地平を提示したと注目を集めた作品。



www.elganokuni.com/sylvia/

② 《8人の女たち》 (2002年 フランス 111分) フランソワ・オゾン監督

日時：12月8日(土) 15:00～

カトリーヌ・ドヌーヴ、エマニュエル・ベアール、ファニー・アルダン、ヴィルジニー・ルドワイヤン、リュディヴィーヌ・サニエなど新旧のフランスを代表する女優たちが共演したミュージカル仕立ての推理劇。クリスマスの夜、とある一家の主人の殺人事件が発生。電話線が切られ、密室状態となった大邸宅の中で取り残された女性たちは、犯人を探すべくお互いを詮索し始める。そして隠されてきた秘密が次々と明らかにされていくのだが・・・ 1961年に初演されたロベール・トマの戯曲がベースとなっている。フランスでは、あの「アメリ」を抜いたオープニング記録を樹立し、話題となった。



③ 《クリスマス・ストーリー》 (2008年 フランス 150分) アルノー・デプレシャン監督

日時：12月9日(日) 15:00～

母の病気をきっかけに、疎遠になっていた子どもたちが、クリスマスを通すため家に集う。しかし絶縁されていた次男の登場により、久しぶりの家族の再会に波風が立ち始め、各々が抱いていた不安や寂しさ、秘密めいた想いがあらわれていく。理想とはいえない状況の中で、家族はそれぞれのやり方で病気の母を救おうとする。『エスター・カーン』などで知られる名匠デプレシャン監督が、自らの故郷で撮影した、人間ドラマ。



いずれも 参加料：500円 **チケット制** 定員：70名

会場：当館多目的室 企画協力：(株)サールナートホール

チケット販売：10月2日(火)より当館受付にて販売 (定員になり次第販売終了)

静岡市美術館



アクセス

《電車》 JR 静岡駅北口より地下道を利用して徒歩3分
静岡鉄道新静岡駅より徒歩5分

《新幹線》東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約1時間
新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約2時間

《車》 東名静岡ICより約15分
※お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

《空路》 富士山静岡空港より静鉄バス
(静岡エアポートライナー)で約1時間

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F
Aoi Tower 3F, 17-1, Kouya-machi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN
tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当:小川・山本 広報担当:鈴木・大庭
tel. 054-273-1515 (代表) info@shizubi.jp

